

西村靖敬先生を送る

土 田 知 則

三〇年以上にわたり、教育・研究・管理業務等において多大な貢献をされてきた西村靖敬先生が、2018（平成30）年3月末をもって定年退職されることになった。

西村先生は東京大学大学院人文科学研究科比較文学・比較文化専攻（博士課程）を1982（昭和57）年3月に単位取得満期退学された後、東京大学助手（教養学部）の職を5年間（1982年4月～1987年3月）勤められ、1987（昭和62）年4月、千葉大学文学部に助教授として着任された。その後、1999（平成11）年、教授（文学部）に昇任され、現在に至っている。

西村先生について先ず触れなければならないのは、学部内外の要職を数多く歴任され、大学の管理運営に優れた能力を発揮されたことである。そうした役職は、主なものだけでも、文学部長、文学研究科長、評議員、附属図書館長、学長補佐、国際言語文化学科長、教務委員長、日本比較文学会事務局長・理事等、枚挙に暇がない。これだけの数の大役を穏やかな面持ちで、そつなく淡々とこなしていく先生の姿には、多くの人たちが敬意の念を覚えたに違いない。国際言語文化学科・コースは、先生のお陰で、他の学科と比しても遜色ない体裁を維持できたと言っても、強ち過言ではないだろう。

フランス20世紀文学、比較文学・文化を主な対象とする西村先生の研究業績は、概ね以下のとおりである。

特筆すべきは、『A・O・バルナブース全集』（1913年）、『幼なごころ』（1918年）、『恋人たち、幸せな恋人たち』（1921年）等の小説で知られるフランス人コスモポリット作家、ヴァレリー・ラルポー（1881-1957）に関する研究。いわば先生の業績の要を成すもののだが、一連の研究成果は、2001年2月刊行の著書『1920年代パリの文学「中心」と「周縁」のダイナミズム』（多賀出版社）および、2017年10月刊行の著書『文学の仲介者ヴァレ』

リー・ラルボー——ラルボーとホイットマン、バトラー、ジョイス、ラテンアメリカの作家たち』(大学教育出版)において見事に提示されている。

比較文学者である先生の研究は、ラルボー、アンドレ・ジッド、エドゥアール・デュジャルダン、ブレーズ・サンドラール、ジャン・コクトーといったフランス人作家に対する議論に、ジェイムズ・ジョイス、ウィリアム・フォークナー、アーネスト・ヘミングウェイ、ウォルト・ホイットマン、アルトゥル・シュニッツラー、ミゲル・アンヘル・アストウリアス等、多国籍の作家と作品を横断的に関わらせるところに特色があり、取り上げられる問題も「内的独白」、「翻訳・受容」、「ナラティヴ」、「改作」等、多様性に富んでいる。

また、忘れてならないのは、先生が一貫して日本近現代文学に注いでこられた関心の深さである。ここには比較文学者の面目躍如たる姿勢が窺われる、その分析対象は、横光利一、堀辰雄、有島武郎、森鷗外、さらには画家、岡本太郎にまで及んでいる。

このように、西村先生は比較文学者として、一人の作家、一つの国、一つの領域に縛られない、まさに“コスモポリットな”研究スタイルを維持し続けた人と言えるだろう。

先生に初めてお目にかかったのは、私が先生より一年遅れて千葉大学文学部に赴任した1988(昭和63)年春であった。私は専任講師の身分だったので、先生は最も年齢の近い先輩というお立場にあった。生来風来坊風情の私とはまったく違う、身なりも振舞いもきちんとした若き俊英といった印象で、「ああ、こういう人がまさに大学の先生なんだな」と痛感させられたことを覚えている。フランス20世紀文学という近しい研究領域を共有し、着任から今日まで隣の研究室(先生が302、私が303)で過ごさせていただいたことは、私にとって大きな幸運であり、また喜びであった。

いつの頃だったろうか。先生のご家族(奥さまとお嬢さん)に、研究室の前で一度だけお会いする機会があった。私が赴任した年の暖かい時候の頃だったと、うっすら記憶しているが、正確な年月は定かでない。その時はまだあどけない少女だったお嬢さんも、今や慶応義塾大学大学院でフランス文学を専攻され、お父さんの守備範囲でもあるアンドレ・ジッドを研究してい

西村靖敬先生を送る

るというお話を、最近先生からお聞きした。先生も私も歳をとったなど実感すると同時に、何とも言えずほんのりとした気持ちになった。

西村先生、三十年以上もの間お付き合いくださり、ありがとうございます。先生のご健康と今後の一層のご活躍を心よりお祈りいたします。お疲れ様でした。

西村靖敬先生略歴

学歴

- 1975年 3月 東京大学教養学部教養学科フランス分科卒業
1975年 4月 東京大学大学院人文科学研究科比較文学比較文化専攻（修士課程）入学
1977年 3月 東京大学大学院人文科学研究科比較文学比較文化専攻（修士課程）修了（文学修士）
1977年 4月 東京大学大学院人文科学研究科比較文学比較文化専攻（博士課程）入学
1978年10月 パリ＝ソルボンヌ（パリ第4）大学第3期課程（博士課程）入学（留学）
1979年 9月 Diplôme d'études approfondies（専門研究課程修了証書）（パリ＝ソルボンヌ〔パリ第4〕大学）
1980年 9月 パリ＝ソルボンヌ（パリ第4）大学第3期課程（博士課程）単位取得満期退学
1982年 3月 東京大学大学院人文科学研究科比較文学比較文化専攻（博士課程）単位取得満期退学

職歴

- 1982年 4月 東京大学教養学部助手に採用
1987年 4月 千葉大学文学部助教授に昇任
1987年 4月 千葉大学大学院文学研究科（修士課程）授業担当（仏文学）
1995年 4月 千葉大学大学院社会文化科学研究科（博士課程）授業担当（比較文学論）
1999年 2月 千葉大学文学部教授に昇任
2003年 4月 千葉大学文学部長、文学研究科長（2007年 3月まで）
2007年 4月 千葉大学附属図書館長（2011年 3月まで）
2030年 3月 千葉大学文学部定年退職

学会および社会における活動等

1977年4月より 日本フランス語フランス文学会会員

1980年10月より 日本比較文学会会員

1987年7月より 国際比較文学会会員

2008年8月 日本図書館協会大学図書館部会部会長 (2009年7月まで)

2008年8月 国公立大学図書館協力委員会委員長 (2009年7月まで)

西村靖敬先生主要研究業績

著書

- ・『祭りのディススクール—民衆文化と芸術の接点』（共著）、多賀出版社、1993年1月
- ・『1920年代パリの文学—「中心」と「周縁」のダイナミズム』（単著）、多賀出版社、2001年2月
- ・『文学の仲介者ヴァレリー・ラルポー—ラルポーとホイットマン、パトラー、ジョイス、ラテンアメリカの作家たち』（単著）、大学教育出版、2017年11月

学術論文

- ・「ラルポーとジョイス—コスモポリットとエグザイルの交遊」、『比較文学研究』第34号、1978年12月、40-79頁。
- ・「ヴァレリー・ラルポーのコスモポリチスムをめぐる諸問題」、『比較文学研究』第39号、1981年4月、148-155頁。
- ・「短編集『幼なごころ』に描かれた子どもたち—ヴァレリー・ラルポーの子ども観」、『東京大学教養学部外国語科研究紀要』、第32(2)号、1985年2月、35-59頁
- ・「トランザトランテーター—コスモポリット=バルナブースの帰還」、『Meli-Melo』、第1号、1985年11月、1-8頁。
- ・「堀辰雄『菜穂子』とアンドレ・ジッドの三部作」、『比較文学』、第40号、1998年3月、21-32頁。
- ・「日本における「内的独白」—有島武郎『星座』を中心に」、『人文研究』、第32号、2003年3月、125-150頁。
- ・「堀辰雄の翻訳と創作—ジャン・コクトーとの関係を中心に」、『人文研究』第33号、2004年3月、331-353頁。
- ・「横光利一『旅愁』—パリとの格闘」、『人文研究』第36号、2007年3月、77-104頁。
- ・「ヴァレリー・ラルポーとジェイムズ・ジョイス—『ユリシーズ』の伝説

西村靖敬先生を送る

- 訳をめぐって』、『千葉大学比較文化研究』第1号、2013年11月、1-11頁。
- ・「ヴァレリー・ラルボーのウォルト・ホイットマン受容：批評と翻訳を通して」、『人文研究』第42号、2013年3月、25-56頁。
 - ・「ヴァレリー・ラルボーのウォルト・ホイットマン受容：バルナブースとホイットマン」、『人文研究』第43号、2014年3月、121-141ページ

その他

- ・柳父章著『翻訳学問批判』（書評）、『東京大学新聞』第1484号、1985年12月
- ・野田康文著『大岡昇平の創作方法』—『俘虜記』、『野火』、『武蔵野夫人』』（書評）、『比較文学研究』第91号、2008年6月、151-155頁。
- ・中村三春著『花のフラクタル：20世紀日本前衛小説研究』（書評）、『比較文学』第55号、2013年11月、211-214頁。